

## 若手会員のための論文指導ワークショップの記録

若手育成委員会委員長  
本田 由紀（東京大学）

2018年3月17日に、日本教育学会若手育成委員会主催の「若手会員のための論文指導ワークショップ」が東京大学教育学部において開催された。これは2017年3月の「方法論ワークショップ」および同年8月の大会時における「若手交流会」に続く3回目の若手会員向け企画である。当日は、教育学に含まれる個別分野から後掲の7名の講師の方々をお招きし、49名の若手会員が参加した。

午前中は「査読に通る論文とは」と題するパネルディスカッションを開催し、講師の方々から、論文や査読コメントへのリプライペーパーを書く際の工夫や注意点などに関し、ご自身の実体験に基づいて活発な議論が行われた。研究に関する日常的なタイムマネジメントや近いテーマを扱っている他領域の研究者との交流の重要性、1本の論文では1つのイシューのみをきっちり論じ切ること、適切な投稿先を選びその分野の「作法」や関心事を見極めること、論文冒頭の「はじめに」の書き方で勝負は決まること、弱点を極力減らし可能なことはすべてやりきって「落とされない」ための対処をすること、誰が査読者になりそうかの見当をつけておいてあらかじめ対処しておくこと、意に反する査読コメントに対してどこまで「魂を売り」どこまで反論するか葛藤、複数の査読コメント間で異なる要求をされた際の苦心、リプライペーパーは丹念に多くの字数をかけて書くこと、「今まで見えていなかったものを可視化する」「当該分野の知を一步前進させる」という論文の意義を自覚しプライドをもって取り組むこと、など、きわめて実践的でありながら研究者としての理想にもかかわる意見を多数うかがうことができ、司会を務めていた筆者（本田）にとっても新鮮な学びが得られた時間であった。

午後は7つの部会に分かれ、それぞれに若手育成委員会のメンバーも加わり、講師の方々から参加者からの相談に対してアドバイスを行う形でのワークショップが行われた。夕刻からの懇親会の場でも、賑やかな議論や交流が続いた。部会や懇親会での参加者の言葉の端々から、若手会員の中には所属先の事情等により、閉鎖的な環境で、もしくは孤独な状況のもとで、苦しく研究を進めている場合も珍しくないことが伝わってきた。学会としてこのような機会を設けることの重要性について改めて痛感された。

以下には、各部会の様子について講師の方々による記録や感想を掲載する。お忙しい中、後進を育て励ますことに貢献したいという気持ちから、本ワークショップにご協力をくださった講師の方々に、心より感謝する。

### 「教育哲学・思想史」部会

小野 文生（同志社大学）

参加者が4名と少ない部会だったため、その分、一人ひとりに時間を取って対応することができた。お願いして、世話人の澤田稔会員からも適宜コメントをしていただいたが、複数の意見が聴けたこと、何よりそのコメントが的確だったことが、参加者には良かったのではないと思う。問題関心や研究テーマについて自己紹介したあと、用意してきた論文草稿がある場合は共有し、個別の質疑応答をおこなった。質問は、論文の具体的内容にかかわるものから、常日頃抱えているより大きな問い、そして研究者になるために必要な心構えや

工夫など、多岐にわたった。その一部を以下で紹介する。

参加者すべてが共通して抱えていた困難は、「先行研究の整理と論じ方」と「問いの設定の仕方」だった。そしてこれら二つの問題は、相互に関連しているように思われた。

先行研究に関する質問を聴いていて感じたことは、参加者においては一様に、先行研究分析とは何かという理解が不足しているという点だった。先行研究はただ紹介すればいい飾りではなく、きちんと読み込み、その長所と短所を最大限汲み取る誠実な読解分析が必要である。そのうえで、無視してもよいもの、単に紹介するだけでよいものもあれば、詳述しながら自己の論拠を補足するた

めに使うもの、それとは逆に、批判するために使うものなど、いくつかの位相で使い分ける必要がある。また、序論、本論のどこでどれを使うかの見きわめも大切だろう。

さらに、「先行研究が少ない場合にはどうすればよいか」という質問も参加者に共通していた。教育哲学・思想史研究の領域では、表面上（狭義の）教育との関係性が見えにくい思想・思想家を研究対象とすることが稀ではない。そのため、先行研究が必ずしも豊富にあるわけではないということは、この分野の研究者がしばしば出会う困難の一つである。しかし、できる工夫、しなければならぬ工夫は、それなりにある。

当たり前だが、そもそも先行研究は多ければいいという問題ではないので、少なくともそれを有効に位置づける工夫が必要である。

そのことを前提として、次に、「本当に先行研究が少ないのか」を確かめなければならない。日本語、英語は当然だが、それ以外の複数の外国語を使って可能な限り文献や資料を渉猟する（当該テーマに関しては自分が世界で一番通曉しているといえるくらいの意気で文献を読み込む努力をする）。また、スケールの大きい思想（家）・哲学（者）ほど、多領域にまたがって研究されている。教育学以外に、哲学、思想史、社会思想、社会学、歴史学、政治学、宗教学、言語学、心理学、医学、芸術学など、領域を跨いで文献を渉猟する。

さらに、問題設定の工夫をする。「〇〇の言語活動の経験」というテーマを出した参加者がいたが、たとえばこのような設定をした場合、たとえその思想家〇〇の先行研究が教育学分野になくても、「言語」研究という視点で見れば教育学には無数の研究がある。また、「経験」という視点で見れば、やはり教育学には無数の研究がある。ならば、「〇〇の言語活動の経験」というテーマの独自性や意義を論じるためには、当然ながらそれら無数の「言語」や「経験」に関する教育学の先行研究を適切に読み込み、分析し、整理しながら、自分の論文を位置づけるための思想地図を描くことが必要になってくる。そのとき、単純に「先行研究が少ない」などともはや言えなくなるはずである。

おそらく、「先行研究が少ない」と思っているあいだは、論文の主題となる「問い」もまた、うまく定まっていけないのではないか。

それでもやはり先行研究が少ないとしたら、最後にできる工夫は、たとえば「先行研究が少ないこと」の意味を考え、それ自体を論文において主題化するということである。「なぜ先行研究が少ないのか」を問い、単純にまだ注目されてこなかっただけなのか、それとも何か本質的な理由がその思想に含まれているからなのか、そうしたことを考えてみるという工夫である。「ない」ことを嘆くのではなく、「ない」ことの意味を併せて問えばいい。その作業は、教育研究のディシプリンの境界を問うことにもなるため、教育哲学・思想史研究の「意義」についての根本的な省察へ向かわせるはずである。そこで生まれてくる数々の問いは、おそらく容易には答えることのできない類のものだろうが、各人がその問いに向き合いつづけることは、きっとそのひとの研究の論理を鍛えることになるだろうし、もしかするとそのことで、新しい学問の地平を切り開くことにつながるかもしれない。

「一般に教育学者と見なされない思想家の思想をテーマにする場合、結論でその思想の教育学的意義……といったオチをつけようとした途端、ずいぶん凡庸な結論になってしまうことがあるのですが、どうしたらいいでしょうか」という質問を受けた。多かれ少なかれ、同じような問いを抱えてきた私も自分なりに応答を試みはしたが、やはりいまだに明確に答えることはとても難しい。研究には当然、何らかの目的がある。しかし、思想研究が単なるお役立ち論に墮すことを回避するにはどうすればいいか。いずれにせよ、この問いもまた、各人がそれぞれに答えを見つけるしかない類のものであり、またその答えのうちはそのひとの研究者としての姿勢や方向性が滲み出るような、そういう問いであるだろう。一見すると教育を主題化して語っているわけではまったくない思想。にもかかわらず、なぜ魅了されるのか。これこそ教育の問題に関わるのではないかという直感が働いたとしたら、それはなぜなのか。結局のところ、その魅了と直感の根柢を深く掘り下げていき、自分なりの論理と表現と文体を生み出していくほかない。そんな、自分自身が幾度となく繰り返した内的な問答の一端を想起させられる時間は、かつての自分に話しかけているような錯覚に襲われる時間でもあり、疲労困憊ではあるけれど、他方でやはり、真摯な問いを発する参加者との対話は心

地よい余韻をもたらしてくれた（企画をご準備いただいた先生や院生スタッフのみなさまに感謝申し上げます）。

## 「教育行政学」部会

青木 栄一（東北大学）

参加者数は10名だった。机の配置を車座として、ゼミナール形式で展開した。3時間連続して熱心な質疑応答と議論を行った。参加者は大学院生（修士課程、博士課程、フルタイム、パートタイム）、大学等に就職して間もない若手・中堅会員まで幅広かった。

以下、学会として共有すべきと思われるいくつかのトピックについて記す。ただし、必ずしも参加者の実際の個別事例であるとは限らないことをお断りしておく。

最も印象に残ったトピックは、初職に就いた際の論文執筆についてである。教育行政学や関連領域の教員として就職した場合、多くの就職先では、自身と同じ研究分野の同僚はいない。また、図書館等の学術資料が豊富であるとは限らない。これらを研究資源と考えれば、大学院生時代に利用できた研究資源よりも就職後の研究資源の方が十分でない場合がありうる。こなすべき業務（オブレーション）もまた大学院生時代よりも増えるだろう。就職前に博士号を取得しないケースもありうるが、そのような場合には、まず博士号取得のステップとして国内の全国学会の査読論文が必要となることがある。このワークショップに向けた筆者自身の準備段階では十分認識しなかったのだが、査読論文執筆のアドバイスは「富者の論理」で行うだけでなく、いわば不利な立場を想定したものでもあるべきと実感した。査読論文執筆にエフォート100で取り組み、指導教員を含む周囲のアドバイスを反映しながら、所属組織の図書館資料（電子ジャーナル、新聞データベース等を含む）を活用して、必要があれば日帰りでもインタビュー調査ができてしまう前提条件を自明のものとしていたことに反省を迫られた。分科会の途中で気づいたが、研究資源を十分に活用できない環境において、なおモチベーションを維持しながら、採択される査読論文をどう書き続けるかという切実な問いに答えることが求められていたの

である。この点について、参加者が満足できる回答は講師として十分にはできなかったと思うが、少なくともそうしたリスクを参加者間で共有することはできた。就職した機関の研究資源にのみ依存するのではなく、大学院生時代の研究資源をいかに活用可能な状態で維持するかが重要となるだろう。また、就職後に開拓した研究資源（人脈含む）を新たに活用することも必要なことだと思う。

次に重要と思われるトピックは、複数の投稿先候補の中からどこを選択し、どうやって「書きぶり」を変えるかというものである。日本教育学会はもちろん、日本教育行政学会、日本教育経営学会、日本教育制度学会、日本教育政策学会、日本教育社会学会、日本比較教育学会、日本高等教育学会と、教育学に分類される学会のうち、関連度が高いと思われる学会がこれだけ存在する。査読論文の本数を増やすという現実的な課題からすれば、このトピックはきわめて重要である。まず研究成果を論文という体裁で、学会誌という媒体で公表する際の基本に立ち返ることが必要である。問題関心を先行研究との関連において操作化し、先行研究の到達点を確認した上で、学術的貢献ができる問いをつくり、適切な情報を適切な方法論で分析し、問いに対応した答えを導き出し、これら一連の過程を論理的に記述することが重要である。各学会には学術的知見が蓄積されており、それを参照することが求められる。おそらく学会毎に類似テーマであっても参照されるべき先行研究が微妙に異なる可能性があり、それを察知する必要がある。いわばそれぞれの学会にはそれぞれの文脈（歴史、経緯）があり、そしてそのことに対するプライドがある。査読者が当該学会のメインストリームを歩んできたかどうかはここでは別問題であり、査読者というものは、その役割認識として当該学会の文脈を意識するものである。場合によっては、周辺的存在の査読者の方が「過剰適応」するかもしれない。投稿者として必要なのは、こうした査読者の立場を意識することである。これは無理に「書き分ける」ことを推奨するのではない。本来、教育の政策、行政、政治、経営、制度を社会科学的分析するという意味で、メタレベルでの問題関心は共有しているはずである。なお、読者が投稿しようとする論文のテーマが、各学会の伝統的なテーマや問題関心からやや「ずれて」いる場合、日本教育学会の『教育学研究』

は有望な投稿先ではないだろうか。その理由は各学会の（擬似）ディシプリンとの親和性をそれほど気にしないで済むからである。ただし、この場合でもある程度メタレベルのリサーチ・クエスチョンと関連づける必要はあるだろう。

また、査読論文投稿者として求められる「振る舞い」もあるように思われる。教育系の学会誌のなかで査読論文コーナーは、現実には、大学院生、若手研究者の登竜門として位置付けている。水準は別として、方法論を意識した論文が高く評価されるだろう。ただし、不十分なインタビューを半構造化面接などと言ってしまうのは逆効果であるし、計量分析でいえば高度な分析技法を誇るのはかえって無知を晒すことになりかねない。方法論ありきで執筆するのではなく、問いに応じた方法論を「選択」することがオーソドックスである。

掲載される論文を書きたいと考えるよりは、落とされたい論文を書くというスタンスの方がよい。査読者が容易に指摘するであろう、当該学会の文脈無視や、我流・知ったかぶりの方法論誇示を回避することが重要である。その上で、対象に関する十分な情報収集をふまえた「分厚い記述」が必要である。「記述」は「説明」より劣るものではないが、「薄い記述」では通用しない。

## 「教育社会学」部会

石川 良子（松山大学）

「教育社会学」部会は、石川と担当委員を含めて計11名が参加した。最初に部会の進め方について、参加者の疑問や悩みに講師がコメントやアドバイスを与えていくのではなく、参加者全員で輪になって語り合うことを提案した。こうしたスタイルを選んだのは、次のような理由による。

つまり、このようなワークショップが企画されるのは、研究や研究にまつわるあれこれをざっくばらんに話せる機会が不足しているからではないか、と考えたためである。自分が大学院生だった頃を振り返ってみると、大学院を中心に学外での研究会も含めて、研究や研究にまつわるあれこれについて気楽にしゃべれる場が当たり前のようであり、そして、そのおしゃべりを通して論文の書き方や投稿先の選び方といった研究のコツに加え、研究者としての心構えなど非常に大切なことを学

ばせてもらった。今回のワークショップだけで全てを語り尽くせるはずもないが、まずは溜まっていたものを吐き出せる場を作ることが大事だと思った。

さて、「おしゃべり」の話題は尽きることなく、また多岐にわたった。午前中に引き続いて査読論文の書き方（投稿先の検討、査読コメントへの対応など）に始まり、調査に関する疑問や経験談（とりわけ質的調査について、フィールドの探し方、知見の一般化、話の切り上げ方、インタビュー・データのまとめ方など）へと話は広がっていき、やがて研究生活を成立・継続させるうえでの様々な悩みが溢れ出した。企画趣旨からして参加者の中心は大学院生なのだろうとイメージしていたが、この部会では職を得ている方の参加が多かったこともあって、とくに日常業務と研究、仕事と私生活のバランスの取り方については盛り上がった。さらには人生設計をどう立てていけばよいのか等々、プライベートにも関わる突っ込んだ話にまで及んだ（したがって、当日の内容を丁寧に紹介することは控えたい）。

テクニックやスキルを身につけたからといって、それだけで順調に研究を進められるようになるわけではない。午前中のパネルトークで他の先生方のお話からも感じたことであるが、研究とは1人きりでするものではないと、つくづく思う。あの場が、このワークショップを企画・運営された皆様のねらいに適っていたのかどうか、正直心もとない。しかし、今回のワークショップが参加してくださった皆様にとって、互いに学び合うことのできる「おしゃべり仲間」を作るきっかけになってくれたのだとしたら、こんなに嬉しいことはない。

## 「教育史」部会

須田 将司（東洋大学）

初めに依頼を受けたとき、既に「若手」ではなく「若手よりちょっと年長者」になってしまった自分の立ち位置に戸惑い、それを拭えないままに当日を迎えた。結果から言うならば、早春の陽光あふれる赤門をくぐり、そして夕暮れに出るまでの半日間は、アドバイザーである自分にとって大変に実り多い時間となった。

実行委員会から事前に6名参加で質問内容を頂くことができた。内容は教育史研究の目的から技術的なものまで幅があり、①教育史研究とは何か、②課題意識の明確化と論文化、③オーラルヒストリーの活用方法、④論文中における史資料の取扱い方法、⑤査読付き論文の観点、⑥リライトの仕方、などであった。これらを番号のような順で、概念から具体へと議論することとした。直前まで「ワークショップ」についてあれこれ考え、1つあたり「説明3分、個人作業3分、ペア共有3分、全体共有6分、コメント&質疑応答11分」で25分間議論することとし、ワークシートを作成して臨んだ。結果として4名の参加となり、①、②、④、⑥について(①のみ個人作業やペア共有をやってみたが、②以降は全体討議に切り替えて)じっくりと議論をした。

①、②の問いは、教育史研究の入り口に立つ初学者や、歴史的手法を用いようとする者にとって必ず直面するものであり、この点が解決しなければ論文化には進めない。まずは「問い」の背景にある参加者の思いや経験を聞くことから始めた。参加者の問いは、日常的に教育史研究者と接点がない分野・領域に属するなかで、教育史研究の魅力や意義を理解したい、納得したいという強い欲求に根ざすものだった。これに対して教育史研究は、史資料の解釈や吟味を重ねて過去との対話から言葉や思考を精選するので、「賞味期限の長い」(簡単にはくつがえられない、または長く読み継がれるような)研究業績が生み出されているのではないか、という持論をもって返答したが、十分に応え得たかどうか。夜の懇親会の際に、問いを聞き出そうとする私の姿勢に「ホスピタリティを感じた」と感想をいただいたことは恐縮であった。教育史研究を志す「若手」に対していかに間口を広く、そして魅力を語れるか。今回のアドバイザー役は、「若手よりちょっと年長者」としての自らに課せられた役割と責任とを自覚する得難い機会になったことは確かである。

続く④と⑥の問いは、①、②とは対照的に、日常的に極めて丁寧な教育史研究の指導を受けている方、または教育史研究で既に業績のある方が、いかに先行研究に対して意義と説得力のある研究論文を作成していくべきか、という実践的なものであった。議論のなかでは教育史研究者の固有名詞や先行研究を具体的に挙げながら、それらの学

ぶべき点や、「若手」として対峙し乗り越えていくべき点などを考え合うことができた。一つの先行研究であっても、また一人の研究者であっても、読み手が異なれば見解や評価が異なる。一人で抱えるのではなく、複数の眼や視点から検討を重ね、その先にある史実や真実を見定め、また自身のオリジナリティを自覚化する機会は極めて重要だ。私自身も、指導教員の叱咤激励や院生仲間との議論、そして研究会への参加で何度も研究意欲を再燃させてきた(翻って言えば消沈しそうになったことも度々)。参加者にとって、そうした機会の一つになることができたとすれば幸甚である。オブザーバーの本田由紀先生にも、たびたび議論を深めるご助言を頂き感謝しきれないほどの思いである。本田先生は、研究と生活との両立に忙しい院生、就職後まもなく業務に忙殺される若手の事を思うと今回のようなワークショップは意義深いと述べられていた。まったく同感であり、今後も継続的に設けられるべきと考える。

今回のアドバイザー参加に際し、同世代や先輩研究者の方々から「どんな質問があったか聞かせてほしい」との話が複数あった。教育史研究者として自立を目指し、がむしゃらに走って来た私たちの世代にとって、「若手育成」は次なる大きな課題として眼前に映り始めている。今回の経験はその意味でも得難いものであり、同世代の研究者の間で議論していく宿題をいただいたように感じている。

今後もこうした企画が、実り多く継続されることを願う次第である。

企画をご準備いただいた若手育成委員会のみなさまに厚く感謝申し上げます。

## 「比較教育」部会

黒田 友紀(日本大学)

部会のはじめにそれぞれの自己紹介と質問をしていただいて課題を共有し、その後、ご自身の体験や意見を自由に話して頂く形式で議論を行った。質問や悩みのうち、比較教育学と自身の研究との関係、時間のマネジメントと論文執筆、投稿論文における先行研究の扱い方が参加者に共通する課題であった。

まず、参加者の多くから「海外を対象とする研

究をしているが、『比較教育学研究』に投稿するのがよいのだろうか」という投稿先としての比較教育学という領域と、自分の研究は比較教育研究なのだろうかという、比較教育学と自分の研究との関係に関する質問や悩みが語られた。比較教育学は、本来二か国以上を比較検討する学問であろうが、日本の比較教育学会誌の掲載論文の多くが1国を対象としたエリア研究であり、複数国を比較するには投稿論文の規定枚数では十分に比較検討するのが難しいことも議論となった。

比較教育研究の特徴や日本の学会誌の傾向も認識したうえで、ある国のある事柄を研究する場合、自身がその事柄を最もよく知っていることが前提であろうし、世界の研究の水準を知り、分析して論じることが求められるだろう。そして、たとえ1国を対象とするエリア研究であっても、教育の状況や価値を問い直す比較の視点が含まれている場合に、研究の必然性やオリジナリティがより際立ってくるのではないだろうか。比較教育学と自分の研究との関係は、私自身が大学院で学んだ頃からの問いのひとつでもあり、参加者と悩みを共有できるかもしれないと思い、戸惑いながら今回の部会をお引き受けしたが、どれだけ共有してお応えできたかは正直わからない。

また、参加者から比較教育研究に関する悩みが語られた後に、それぞれの比較教育学以外の研究領域についての話も共有した。参加者はみな他の領域での研究もされているが、比較教育学領域での就職は簡単ではないし、就職やその先のキャリアも考慮するなら、比較教育学と関連研究領域(教育行政、教育制度、教育方法、教育社会学等)の研究を並行して行い、その領域に応じた論文投稿をしていくことも必要だろう。

次に、研究や論文執筆の時間のマネジメントについてであるが、参加者のなかで、とくに仕事をしながら博士課程に在籍する会員から、学会参加や研究時間の確保についての苦しさや語られた。しかし、忙しくとも資料収集や論文執筆の時間を確保する努力は惜しんではならないし、むしろ就職してからも研究時間をできるだけ確保したいという話になった。そこで、参加者がどのように研究計画を立てているのか、どのような工夫をしているかをそれぞれに話していただいた。それぞれの状況によるが、修士課程の間は研究に100%の時間と労力をかけられることが多いが、博士課程

以後そうではないことも多い。自分の仕事や研究のペースも考慮しながら、新年度が始まる前に計画を立て、着実に論文を増やしていくことが重要ではないかということも共有した。

先行研究の扱い方については、話を聴くなかで、論文執筆における先行研究の扱いだけでなく自分の研究の位置づけに関する悩みでもあったように感じた。その研究対象を今扱う意義は何か／なぜこれまで扱われてこなかったのか、その対象を扱うことでどのような知見がもたらされるのかを明確にすることで、自分の研究の意味づけやオリジナリティが明らかになるだろうし、どの先行研究をクローズアップする必要があるかも明確になるのではないかと。また、特定の主張を支持しながら論文を展開する場合にも、先行研究で立場の異なる論文を適切に取り上げて検討し、支持する主張が独りよがりではないことを他の論文やデータから提示することが必要だろう。論文投稿後に、修正要求があった場合や再査読となった場合は、要求に応答するなかで、自分の議論の弱さや課題を克服し補強するための再分析と論文の再構成によって鍛えられる。近年、丁寧で教育的な査読が増えていると感じるが、査読を通して育ててくれる学会への投稿とその応答が、自身の成長に役立つと考えられる。

この他、インタビュー調査や事例研究をされている方も多く、質的研究の議論になった。事例の取り上げ方や、インタビューデータを活かしたゆたかな記述を投稿論文の規定枚数内で行う方法や、論文投稿先についても参加者で意見を交流した(質的研究の方法論や論文投稿についても若手研究者のニーズが高いと思われる)。

午前の部でも、研究仲間や研究コミュニティのなかで自身が学んできたという経験が語られていた。今回、私が部会で共有し議論した内容のほとんどが、指導教官や諸先輩方や研究仲間のコミュニティから教わり学んだことである。今回のような学会企画が、さまざまな状況で研究を続ける会員の研究コミュニティのひとつとして機能することを願うとともに、私自身が(アドバイザーとしての役割を果たせたかは非常に心許ないが、)参加者との応答を通して多くを考え学ばせてもらったことを、参加者と企画・運営いただいた委員のみなさまに感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 「教育方法」部会

石井 英真（京都大学）

当初参加者10名とうかがっていたので、時間が足りるかどうかなど、心配な部分もありましたが、当日欠席された方もいて7名の参加者でゆとりをもって会を進めることができました。参加者お一人おひとりに、研究の概要と困っていることなどを出していただき、それらに対して、個別にアドバイスしつつ、関連する問題意識をもった参加者同士をつないだりしながら進めていきました。

たとえば、教育学を専門にしていなかったが、大学に勤め始めて初年次教育に携わるようになり、教育学関連の学会でも発表したいと考えるようになった、高校で日本語教育を行ってきた自身や自身の所属する学校ぐるみの実践をベースに研究を進めたい、長年母子支援の実践を行い効果的だと思われるさまざまな方法を考案してきたのでそれを一般化したい、塾を経営しているが、学習者の学習習慣に早期に働きかけ学力格差を是正していく方法について、その効果を検証しながら開発を進めていきたい、といった具合に、参加者のキャリアや問題関心は多岐にわたりました。しかし、実践経験を研究の土俵に載せていきたいが、どう研究を進めていけばよいのか、どのような学会で、どのような媒体で公にしていけばよいのかといった、実践者自身による実践の理論化やアクション・リサーチのあり方に関わるむずかしさが共通に意識されていたかと思えます。

自らの実践経験をもとに研究する際、まず、自らの問題意識や実践の特質を先達の業績（先行実践・先行研究）との関連で位置づけることが必要です。これまでにない新規の取り組みだと思っても、多くの場合、誰かが同様の問題意識をもって、類似の取り組みをやっているものです。そして、先行実践に出会ったなら、同様の問題意識を持った先達が、自らも直面している課題にどう向き合い、どのような思いをもって、どのように考えながら、先達なりの手法や理論を考案したのか、さらには、それに対してどのようなリアクション（批判や論争）があり、その中で先達がどう自らの手法や理論を鍛え上げていったのか、そのプロセスを丁寧に読み解くことが重要です。先行実践を掘り下げ、それがどのような論点に迫る実践であると位置づけられているのかをつかむことで、

自らの実践を対象化するリサーチクエストionsも見えてくるでしょうし、何より先行実践の追体験の過程自体、実践家としての自身のものの見方を豊かにすることにつながるでしょう。

また、何らかの一般化をめざして自らの実践を学術研究と結びつけるうえで、実践的問題がそのまま研究テーマになるとは限らない点も自覚しておく必要があります。実践研究やアクション・リサーチというと、ある手法を実践したその効果を量的に実証するといった効果検証型の研究スタイルが想起されるでしょう。教育という学習者、教師、教材の複雑で象徴的な相互作用について、効果的な方法を量的に実証することはさまざまな困難を伴います。研究的関心にしたがって実証の精度を上げていこうと思うと、効果検証の対象となる実践や活動の単位（研究対象）は分析的に限定的になりがちです。しかし、すぐれた実践の核心を対象化しようとすればするほど、全体論的な把握が求められ、研究上の厳密性と実践的示唆との間のジレンマを調整することが必要となります。

実践と学術研究とを結びつけるという場合、たとえば、主体的に学びに向かう子どもをどう育てるか、そのためにある方法が効果的かどうかといった直接的な問いを一度中断して、そもそも主体的とはどういうことか、なぜ「主体的な学び」がいま課題として認識されているのかといった具合に、これまでの自らの実践の目的や問題の捉え方自体の妥当性を問い直す視点を持つことも大切です。実践課題自体を対象化する目をもつことによって、理論的課題に迫るリサーチクエストionsを立てることも可能になるでしょう。リサーチクエストionsを立てるということは、研究者コミュニティの理論的関心を共有するということであり、そのためには、自らの問題関心に合致しそうな研究分野の概論書やテキストを読み、その分野の中心的な論点や基本文献をつかむことが有効です。

以上をふまえ、そのような実践的関心なら、このような論点やリサーチクエストionsと関連しそうだ、先行実践や基本文献としてはこのようなものがある、といった具合に、参加者のニーズに応じて、個別に対応していきました。少しでも参加者の方の研究に資するものとなったのであれば幸いです。今回、このような機会を与えていただき、参加者との対話を通して、改めて自らも研究方法論や論文執筆の過程を見つめ直すことができ、多

くを学ばせていただきました。また、午前の部の教育学研究の諸分野の第一線の研究者の方々とのセッションもとても刺激的でした。参加者と企画・運営いただいたみなさまに御礼申し上げます。

## 「英語論文」部会

松岡 亮二（早稲田大学）

〈部会について〉

今回の若手ワークショップの中で最も参加者数が少ない部会となりました。2017年3月に日本教育社会学会の若手研究セミナーで「研究を国際発信する」部会のファシリテーターも務めたのですが、その際も他部会と比べて最小の参加者数でした。2つの学会の「若手」対象ワークショップでもう一つ共通していたのは、参加された皆様が査読論文業績を既にお持ちであることでした。部会でも話題になったのですが、（アドバイザーである私が無名なことに加え）「若手」にとっては日本語で投稿論文や博士論文を仕上げるのが優先事項で英語論文は後回しとなっている現状が、参加者の少なさと層の偏りに繋がったのかと思います（因果関係を確定するものではありません）。参加者こそ少なかったわけですが、司会の仲田康一先生（大東文化大学）のご尽力によって、部会そのものは活発な意見交換が行われ有意義なものだったと思います。私としても午前のパネルディスカッションも含め非常に勉強になりました。企画・運営に携わった全ての関係者の皆様、ありがとうございました。

〈議論内容〉

部会における議論を簡単にまとめます。英語論文執筆は英語で書くことだけを意味しません。日本語で書く際は編集委員と査読者を含む読者層が社会的文脈などを（意識することなく）共有していますが、英語で書いて投稿するときにその前提は通用しません。どのように日本のケースが理論的・実証的に貢献できるのか、（多くは日本に無関心である）編集委員や査読者に対して簡潔かつ説得的に示す必要があります。

このような（やや）抽象的な議題に加え、査読論文の具体的投稿戦略についても議論しました。たとえば、日本の学術誌との違いでいえば、投稿先学術誌の編集委員会宛てのカバーレター執筆です。論文の要旨や導入部の焼き直しではなく、なぜ、その学術誌に投稿しているのか説得的に書けば——論文の価値を編集委員にうまく訴えかければ、査読にまわされる（＝desk rejectionされない）確率も上がるはずですが（因果関係を確定するものではありません）。また、日本の学術誌に比べると待ち時間が長い傾向についても共有しました。投稿から掲載まで2年以上かかることもあるので、投稿後は他の研究に専念するなど、査読日程が決まっている多くの国内誌への投稿とは異なる対応が求められます。

〈学会発表と投稿先について〉

研究環境や就職活動で求められる条件が変わらなければ現実的に難しいかもしれませんが、大学院生を含む「若手」だけではなく一人でも多くの研究者が英語論文を投稿することを願っています。まずは、国内学会で英語発表してみたいかでしょうか。日本教育学会、日本教育社会学会、日本比較教育学会、日本数理社会学会などは英語発表を受け付けています。国内で発表経験を積んだ後は海外に足を伸ばすと良いかと思います。最初の海外学会は、世界中から研究者が集まり日本社会の研究についても比較的興味を持って貰えるComparative and International Education Society (CIES)の年次大会を推奨します。最初の査読付き英字論文投稿先としては、日本教育学会が毎年度末に刊行している“*Educational Studies in Japan: International Yearbook (ESJ)*”が有力な選択肢といえます。ESJ掲載論文はアメリカの教育文献検索サイト(ERIC)にも登録されるので、日本社会に興味がない層にもテーマ繋がりで読んで貰う機会があります。今後、多くの投稿によってESJが認知され、Social Sciences Citation Indexに登録されることで（これまで以上に）世界中の人たちに読まれるようになることを願っています。